

サールナートで初めての説法をされたお釈迦さまは、その後八十歳でお亡くなりになるまでの四十五年間、ガンジス川中流域を中心に説法の旅を続けることとなります。

お釈迦さまの教えに導かれ、多くの人々が信者となり、また弟子となります。そんな中で拠<sup>きよてん</sup>点となる建物が必要となり、寄進<sup>きしん</sup>を受けて、有名な竹林精舎<sup>ちくりんしやうじや</sup>や祇園精舎などの精進<sup>しやうじんしゆぎやう</sup>修行するためのお堂、「精舎<sup>しやうじや</sup>」が建<sup>こんりゆう</sup>立されます。

実際、雨季<sup>うき</sup>の三ヶ月間はこれらの精舎に集まって生活をし、禅定を行ったり論議をするなど特別な修行期間としました。雨季に移動すると、虫などを踏み殺すおそれがあるからという説もあります。この期間を安居<sup>あんご</sup>、もしくは雨安居<sup>うあんご</sup>といいます。

さて、お釈迦さまの説法はどのようなものだったのでしょうか。

その説法は、教えを説く相手の性格や信仰、興味や関心といったことに留意<sup>りゆうい</sup>して教えが伝わりやすいように行われましたので、相手によって説かれた教えの内容は同じではありませんでした。これを「対機説法<sup>たいきせっぽう</sup>」といい、病<sup>やまい</sup>に<sup>おう</sup>応じて薬が与えられることに喩え、「<sup>たと</sup> 応<sup>おう</sup> 病<sup>びょう</sup> 与<sup>よ</sup> 薬<sup>やく</sup>」ともいいます。

また、どんな人にも理解できるように、相手の理解度に<sup>やさ</sup> 応じて、易しい話から難しい話へと、次第に深い真理を説く方法をとりました。これを「次第説法<sup>しだいせっぽう</sup>」といいます。

他にも、教えが伝わりやすくするためにさまざまな喩え<sup>たと</sup> が用いられました。

お釈迦さまがコーサラ国の王様と話された時の喩えです。

人間にとって、老<sup>お</sup>いること、そして死は、喩えば非常に大きな山<sup>しほう</sup>が四方よりすべてのものをおしつぶしながら<sup>せま</sup> 迫ってくるようなものであり、王様の強大な軍隊や、おまじないの力、膨大な財宝の力をもってしてもどうすることもできない。

この教えは「巖<sup>いわお</sup>の山の喩え」といわれます。お釈迦さまは、人間にとって“老いること”や“死”は、大きな山が押し迫ってくるようなものであり、王様の強大な力ですらどうすることもできない。そのときに私たちがすべきことは、ただ教えにしたがって善<sup>よ</sup>き事を行い、功德を積むよりほかはないと示されました。

このように、さまざまな方法で人々に気づきを与えながら、お釈迦さまは休むことなく説法の旅を続けられたのでした。